地域移行 通信

第１２号
平成２２年７月発行

この通信は、部会の様子をお伝えし、関連する機関のみなさまとの情報共有をめざして発行しています。

地域自立支援協議会・地域移行部会が開催されました！

今年度第１回目の地域移行部会を、５月１９日に開催しました。区内外から４２名の方に参加していただきました。ありがとうございました。

この部会は、毎回テーマを設け、障害者が安心して地域で住み続けるための基盤整備について検討しています。今回もフロア一体となって、積極的に意見交換をしました。

５月１９日の主な内容

☆『グループホームを利用してみて、受け入れてみて～グループホームとの連携を考える～』

☆ 情報交換
東京都精神障害者退院促進支援事業など

東京都精神障害者退院促進支援事業の進捗状況

サポートセンターきぬたとＭＯＴＡが東京都事業を受託して３年目になります。広域化をキーワードに、受け入れ先の関係機関と連携を図るため継続したはたらきかけを行っています。

地域生活支援センターＭＯＴＡ

最近の活動状況

○退院促進支援事業での関わりが４年目になる医療機関があります。医療機関側もだんだんと地域のイメージができてきた様子です。数年の時間をかけて関係を築いていくものだと思いました。

○都立精神保健福祉センターのホステルの廃止が決まりましたが、利用していた当事者の想いとして都や精神保健福祉センターに手紙を出しました。センターからはお返事をいただきました。
（宮本さんより）

サポートセンターきぬた

最近の活動状況

○退院後のアフターフォロー体制がスムーズに機能したことがあります。退院前に、ご本人が外来受診日に来院されなかったら、病院から関係者へ連絡することを確認していました。その結果、受診日に来院しなかったときがありましたが、すぐに保健師や支援センターの職員に連絡があり、迅速な対応ができました。
（金川さんより）

世田谷区セーフティネット支援対策退院促進事業の進捗状況

障害者支援情報センター　HASIC

最近の活動状況

○退院に向けて地域住民の方との関係づくりとして都営住宅の草取りに継続して同行している方、就職を機に再び薬物を使用してしまう心配があり、今後も連絡をとり続けたいと思っている方などお話いただきました。

○入院中に知り合った友人が、退院後の生活を支える大事な存在になっている方がいます。入院したことも、この方にとっては必要なことだったと考えることもできるのではないでしょうか。

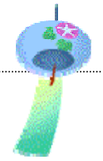
○退院促進支援事業は終了していますが、近隣の方から苦情の連絡があり、今も関わっている方がいます。（進藤さんより）

5月のテーマは、
「グループホームを利用してみて、受け入れてみて」
～グループホームとの連携を考える～　　です。

グループホーム 『いちご Living』 について　■石垣さんより

いちご Living は、「ご家族からの独立生活を目指す方に練習の場を提供する」ことを目的としています。

〇一人暮らしを実現するために、職員はご本人と一緒に「生き方」を考えながら支援しています。
〇全６室（うち交流室１室、短期宿泊室１室）で、職員は常勤２名体制です。
〇利用期間は２年以内となっています。平均すると１０．６ヶ月になります。



退院促進支援事業の方は、これまでに２名入居しています。

〇お一人の方は、これまでに治療中断による再入院、ご家族への暴力で措置入院の経過があった方です。グループホームは病院と比較すると“ゆるい枠”なので、病院で作り上げてきた習慣が崩れてしまう可能性がありました。ご本人と話し合い「退院時の約束事」としてグループホームの生活でのルール作りを行いました。退院後は、デイケアに通ったり、お酒を飲まない生活を続けられ、表情や行動などが随分と変わったと思います。
〇もう一人の方は、怠薬による症状再燃のため入退院を繰り返し、自己退院後自宅閉居となり、ご家族への暴力で措置入院の経過があった方です。最初からグループホームの入居を目指していたわけではありませんが、コーディネーターとは情報交換、相談等でこまめにやりとりをしてきました。その後、ご本人の入居希望が高まり入居となりました。ご本人を支援するという同じ立場で相談できる人がいるという安心感がありました。

ひと言コメント　■退院促進支援事業コーディネーター金川さんより

最初は、病院とグループホームとの調整はコーディネーターが行っていましたが、徐々に両者の関係が築けてくると、コーディネーターを通さずに直接やりとりできていました。

グループホーム 『藍工房』 について　■武井さんより

藍工房は、ご本人が安心して暮らせるよう支援しています。

〇元々は作業所兼住居として障害種別を問わずに自主運営でスタートした施設です。
〇プライバシーに配慮したアパート型の建物で、定員６名で利用期間は３年間です。
〇入居者のうち、約６割が、退去後単身生活に移行しています。
〇最近の傾向として、ご家族からの自立が目的の方、統合失調症以外の方（発達障害の方など）などが利用しています。また、更正施設からの問い合わせも増えています。
〇入居者が退去後３ヶ月間は区から補助がありますが、４ヶ月過ぎると補助がなくなってしまうので、空き室の期間については常に気にかかります。

（＊次ページへつづきます）

退院促進支援事業の方は、これまでに１名入居しています。

〇ご本人の様子としては、グループホームの生活に慣れると、「（家事を通して）主婦が本当に大変だったということが分かった」と話すなど生活を楽しむゆとりができてきたと思います。
〇受け入れて良かったことは、コーディネーターと相談しながら対応できたので職員自身の孤立感がなかったことです。通常は、職員２人で入居者６人に対応しており、利用者を組織ではなく、個人で支える不安感、責任感を感じることがあります。
〇課題としては、グループホーム退去後のアフターフォローの体制です。退去後の１年くらいはご本人もほどよい緊張感があり落ち着いていますが、その後１～２年経過すると気が緩み問題が起こることがあります。その時期には退院促進支援事業のアフターフォローは終了しているので、だれが支え手となるのか、が課題です。
〇また、触法のケースの対応は手探り状態であり、今後利用が増えたときグループホームだけでは支えきれないと感じています。

ひと言コメント　■退院促進支援事業コーディネーター宮本さんより

藍工房に入居してご本人の人生が変わったと感じます。ご家族は退院に反対していましたが、主治医の説得により何とかグループホームの入居に至りました。ご家族は、「主婦の大変さが分かった」というご本人の言葉を聞いて退院できたことを前向きに考えてくださり、主治医も「退院できて本当によかった」と言っているのが印象的です。

グループホーム 『さくらハウス』 について　■小島さんより

さくらハウスは、日常生活に必要な習慣や技術を身につけ、地域での一人暮らしに必要な生活能力を育み、自分自身の可能性が再確認できるよう支援しています。

〇さくらハウスは３ヶ所あり、その中の第１さくらハウスは、全７室（うち交流室１室）で、職員は常勤１名と、非常勤職員が２名になります。
〇「喫煙されない方」という入居の条件があり、希望しても条件が合わないことが度々あります。

退院促進支援事業の方は、これまでに２名入居しています。

〇受け入れて良かったことは、コーディネーターがいたので風通しが良かったことです。グループホームの世話人は、ご本人との距離が近くなりすぎてしまい全体像が捉えにくいことがあります。また、支援に行き詰ったときにコーディネーターに相談できたことも良かったです。
〇課題としては、アフターフォローは「誰が」「どこが」担うのかということです。さくらハウスでは卒業生のアフターフォローが６ヶ月間です。退院促進支援事業もアフターフォローには期限があるため、入居時から、退去後のフォロー体制を考えていかなければいけないと感じています。

ひと言コメント　■協力医療機関スタッフより

平成１６年から約６年間入院されていた方が、今週からさくらハウスに入居します。ご本人は自宅への退院を、ご家族は別居を希望されていたので調整が大変でしたが、ご本人がグループホームの入居に前向きになったところで、早めに入居を決定してくれたのが良かったです。

ひと言コメント　■退院促進支援事業コーディネーター宮本さんより

退院促進支援事業の対象者が２年間さくらハウスに入居していました。出会ったころは会話がなかなか成立しませんでしたが、最近お会いしたときには随分と変わっていたのに驚きました。グループホームに入居していなかったら病気が再発していたのではないかと思っています。

（＊次ページへつづきます）

（＊前ページからのつづきです）

フロアーのみなさんとの意見交換をしました！！　（一部をご紹介します）

○グループホームで１年ぐらい生活できると、その後の単身生活もうまくいくことが多いと感じます。焦ってしまったり、症状を崩して早めにグループホームを退去した方はその後の生活がなかなか安定しない様子があると思います（藍工房・武井さんより）。

○「いちごLiving」の短期利用とは。

－１～３ヶ月の利用のことです。ニーズがあると考え最初は自主運営ではじめました。現在は補助の対象になっています。短い期間でも「一人暮らしをした」という経験はその後の人生に活きてくると考えています（いちごLiving・石垣さん）。

○グループホームの世話人は、どのような支援を行っていますか。職員が少ない中で、現実的にはどのくらいまでの支援が可能でしょうか。

－　“何でも屋さん”と言えます。交流室にしばらく来ていない人は部屋を訪ねて様子をうかがったり、通院同行や物件探しも一緒に行っています（さくらハウス・小島さん）。

－例えば、「お天気がいいね、散歩にいこうか」と声をかけ一緒に外出したり、薬カレンダーで服薬チェックをしたり、物件探し、荷造り、掃除などを一緒に行っています。世話人の仕事はオーダーメイドの洋服を作るようなものだと感じています（いちごLiving・石垣さん）。

－夜間は世話人がいないので、緊急電話のみの対応になります。世話人はその方に合わせて何でも行っています。最近は年金特別便などの郵便物が届いたときの相談も多いです。ヘルパーさんのように直接介助しているわけではないですが、そっと見守っているのも仕事のひとつだと思っています（藍工房・武井さん）。

○区にケアホームがありませんが、グループホーム側からみてケアホームはどのように考えますか。

－精神障害と身体障害の重複障害の方などはケアホームがあるとよいと思います（藍工房・武井さん）。

－高齢問題に対応できるケアホームがあるとよいと考えます。ケアホームという形にしなくても、常勤職員を増やせばもう少し手厚い支援が必要な方の入居も受け入れられるかもしれないと思っています（いちごLiving・石垣さん）

まとめとして・・・

グループホームの職員体制と高齢の方の対応については、グループホーム共通の課題でした。現在の制度では様々な限界がありますが、支援者がチームを組むことで対応できることもあります。それだけでは解決されないこと、制度の見直しや環境整備が必要なものは自立支援協議会に意見を上げていきたいと思います。

今後の開催予定

- ９月１５日（水）午後２時～　セミナールームＡ
- １１月１７日（水）午後２時～　ワークショップＢ
- １月２６日（水）午後２時～　セミナールームＡＢ
- ３月１６日（水）午後２時～　セミナールームＡ

いずれの会場も キャロットタワー内（三軒茶屋）です

＊関係機関のみなさまには、各回とも開催前に“開催のお知らせ”をお送りしています。送付のご希望がありましたら、下記担当までご連絡ください。

－次回以降も引き続き、みなさまのご参加をお待ちしていますー

編集・発行　世田谷保健所健康推進課精神保健担当
電話　03(5432)2442
Fax　03(5432)3022